山田正男著

時の流れ都市の流れ

書評者　八十島　義之助*

本書はB5版857ページよりなっている。内容は著者が多年都市計画に専念し，その間の出来事を回顧録風にまとめ(第1編)，かつその間の著者の論文その他を集録したものである(第2編)。第1編「流れの解説」においては昭和12年，すなわち著者が都市計画に携わりはじめた年から，本著刊行の時点，昭和47年度までを5期に分けて，前半を2期に分け，第二次大戦開戦までの4年間を自動車時代，大都市時代の到来とし，次は以後終戦に至るまでを都市計画，主として防空都市計画の時代としてとらえている。第二次大戦後は3期に区分しているが，はじめを戦後10年の都市復興時代，次の10年を再び自動車時代，大都市時代の到来とし，最後の7年を都市空間ならびに都市環境整備の時代としてとらえている。

内容は，内務省，県，都と職場を移りつつ都市計画一本に専念した著者の都市計画業務に関する回顧を中心としているが，その間，都市計画思想が時代とともに移り変わるさまとか，都市計画が事業となるといかに多くの難関が前に立ちはだかるものかが行間ににじみ出ている。

第二次大戦末期，中国山脈の名も知れぬ町に泊ったとき，松根油採取の学徒を激励したことを思い出し，恥しくも懐しく思ったことや，湯河原の土地区画整理が著者の意図にそって完成したものだが，それを見るたびに愉快を感じるなどの話が混っている。まさに他人の都市計画史でなく，著者の都市計画史であり，感慨をこめた回顧なのである。

安井都政下に計画部長として東京都庁に入るや，まず知事に辞令をもらう前の一注文にも触れている。都市計画に関する限り知事と直接ご相談させていただきたい，と新任の計画部長は直訴した。この辺は著者の面目躍如たるものがある。

第2編は昭和13年以来，著者の著わした論文のうち131編を集録したものである。中には著者の純学術的論文もあるし，論説風のものもあり，英文も7編ほど収められ，多彩をきわめている。そのうちの「大都市における自動車交通需要よりみた都市構成論」は，とくに新宿副都心計画に一つの論拠を与えたものであった。また，渋滞しているのは交通ではなく「交通工学」であるとした，「交通工学の渋滞」なる論説もあらわれる。

131編にのぼる論文・論説の配列は，一見乱雑にみえるし，量の膨大さに圧倒される気味はあるが，見方を変えれば，読者に対する著者のまじめな問いかけであり語りかけであるともとれる。読み続ける論文の中から，著者自身の都市計画に対する考え方，あるいはとくに東京の都市計画の潜在的な理念の移り変わりを読者自身によって描き出し批判してほしいといっているようである。例えば，首都高速道路についていくつかの論文が掲載されているが，それが生まれるまでにどのような形態的・理念的な動きがあったかが，よく読みとれてくる。

つまり，標題のごとく，それは時の流れ，都市の流れを語ったのと同時に，著者の時代，都市に対する考えの那辺にあるかを示すものでもあるのである。

このように本書は，一面，著者自身について最も多く語っているようにも思われる。そもそもこれだけの著述をしながら本務に役立ってきたことだけを考えても，著者は行動の人であると同時に考える人であったことがわかる。プランナーたる者いかに行動が大切か，またいかに理論が大切か，そして文章のはしはしに，かなり明白に感情の吐露がみられるように，プランナーがもしも自己の思想を現実に生かすためには，八方美人などであってはいられないということも物語っている。そして，35年間の論文が，この期に及んで集録できたことからも，著者は自分の理論を大切にする人であることが読みとれる。こんなことは大学にいる研究者でも案外できないことなのだ。

なお一言付け加えるならば，著者もはしがきで「……活字にしておかない方が……であるようなことがらは，当然この文献の中には載っていない……」としているように，全体からみればごく一期間ではあるが，知り得べくして知り得ない体験に本書は触れていないのが心残りである。

いずれにせよ，著者の人柄がにじみでているという点で，まさに履歴書であり，回顧録でもあるが，一方では，戦前・戦後を通しての日本の一つのナマの都市計画史であるというのが，この著書の位置づけであろう。関心ある向きの一読をお勧めする。

* 正会員　工博　東京大学教授 工学部土木工学科

都市研究所（〒100／東京都千代田区丸の内1-4-1，仲28号館602-C）刊，B5判・857ページ，昭和48年6月29日受付．
注：本書の購入等に関しては上記版元へ問合せて下さい．